

# 持続可能性についてのさまざまな 考え方

講師：深井慈子

1. ブレントラント委員会の定義
2. なぜ議論されるようになったのか？
3. 何が必要か？パラダイム転換とは？
4. 代表的な考え方
5. ヴィジョンと戦略ー試案

# ブルントラント委員会の 「持続可能な発展」の定義

- ①世代間公平＝将来世代が人間らしい生活ができるように、生態系を破壊せず、地球の収容能力の範囲内に生産・消費・廃棄を収めることのできる発展
- ②世代内公平＝現世代内でもすべての人が人間らしい生活ができるように貧困問題、南北格差問題を解決できる発展

# なぜ議論されるようになったのか？

## (1) 資源・環境の限界

①有限な地球と無限の成長

②環境運動の台頭と科学的知見の力

◆合成革命と環境汚染

◆『沈黙の春』(1962) ▶ 環境運動

◆『成長の限界』(1972)

# なぜ議論されるようになったのか？

## (2) 貧困・南北格差問題

### ①政治倫理的要因—地球秩序の正当性と安定性

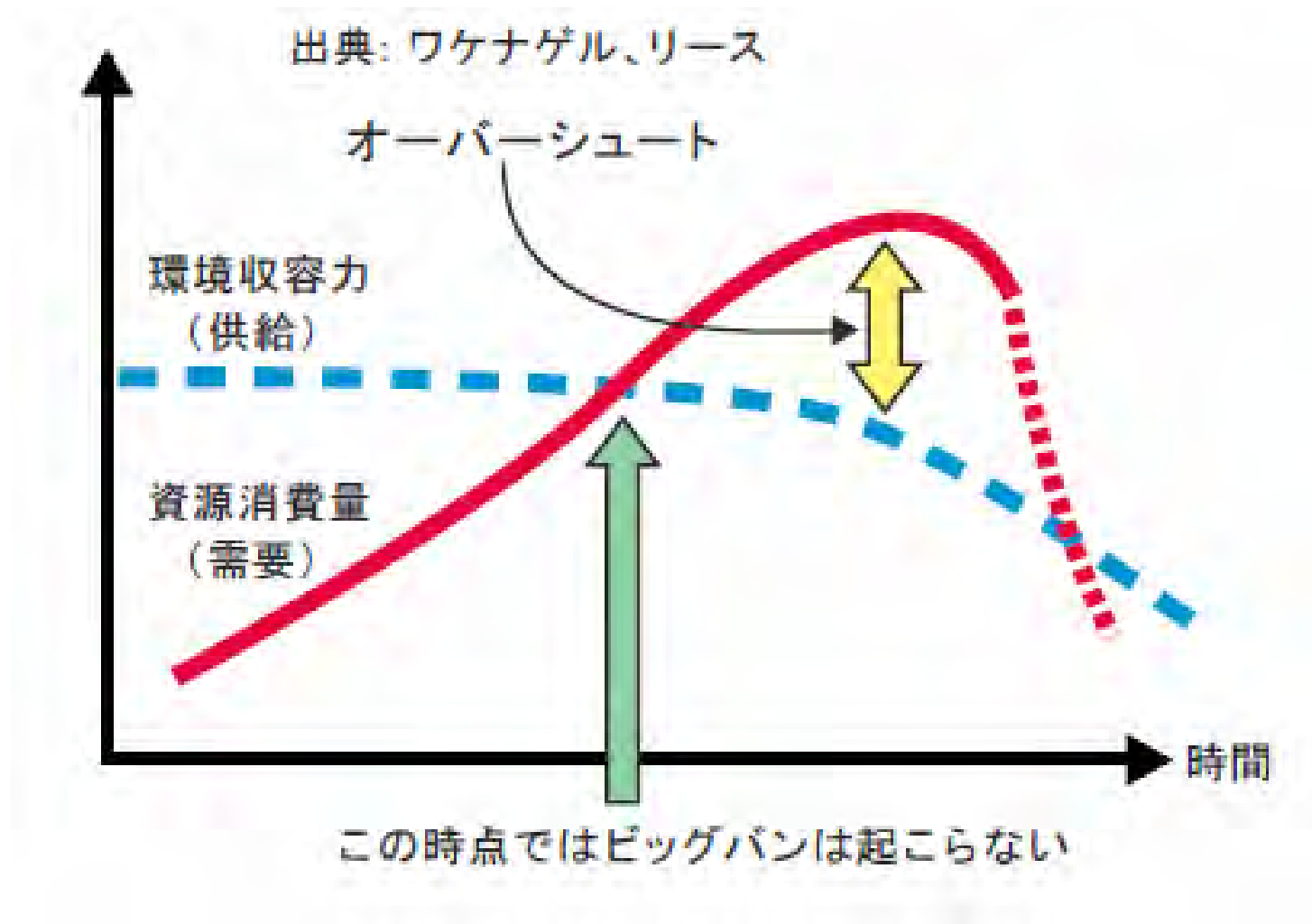
- ◆富の分布と南北格差拡大の実態

- ◆テレビ・NGO ▶ 南でも北でも格差の実態が一目瞭然

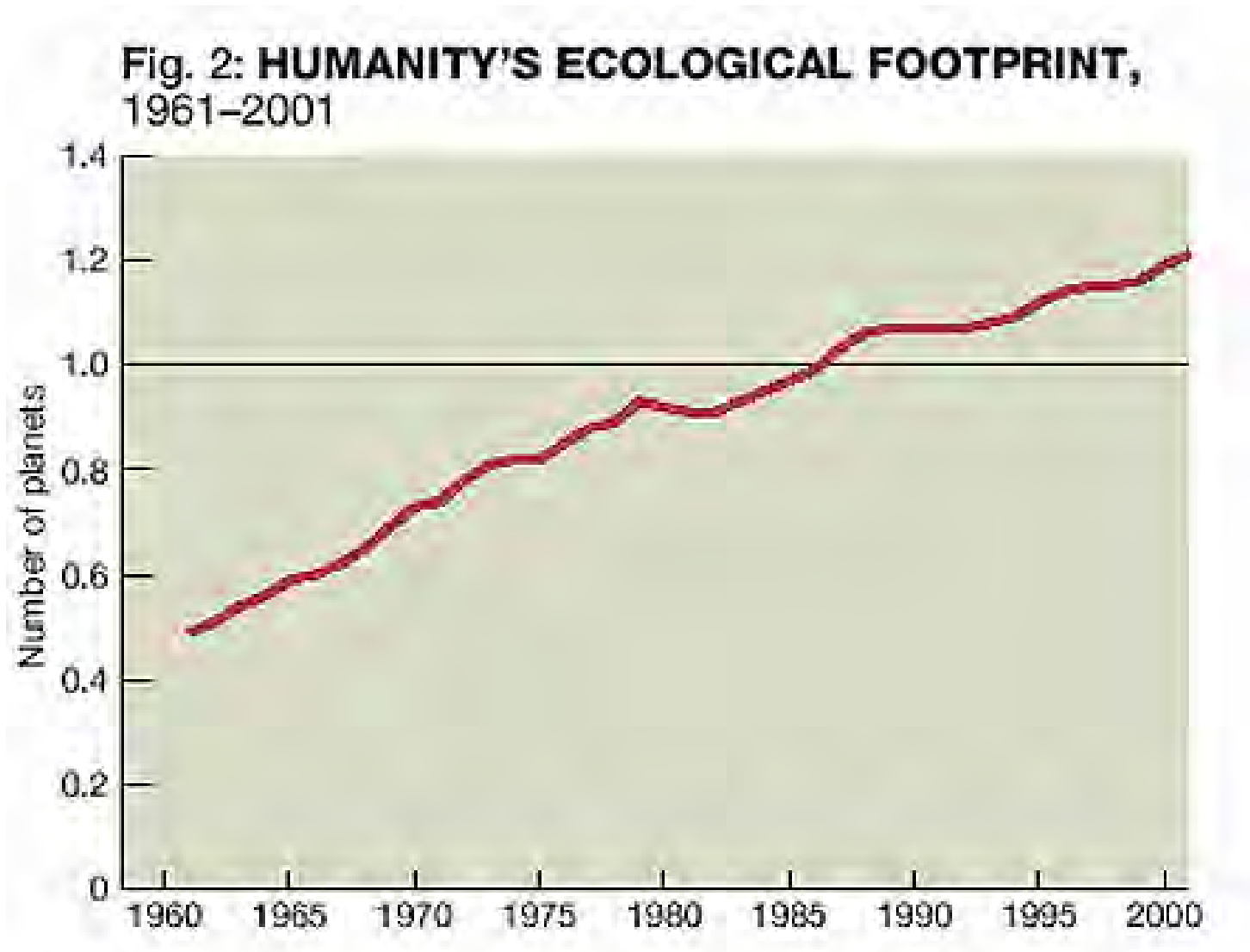
- ◆環境正義運動〔←社会的弱者への環境コストのおしつけ〕

### ②環境資源的要因—オーバーシュート(地球の収容能力の限界を超えると破局がくる)

# オーヴァーシュートの概念図



# 地球の数で表したエコロジカルフットプリント



# 地球の有限性とは ハーマン・デイリーの定義

- ① 汚染物質の分解・吸収力は有限
  - ▶ 汚染排出量 < 分解・浄化能力
- ② 非再生可能(枯渇性)資源は有限
  - ▶ 消費速度 < 再生可能資源代替速度
- ③ 再生可能資源の再生量は有限
  - ▶ 消費速度 < 再生速度

# 合成革命と環境汚染

- 「豊かな社会」を達成した「合成革命」のために、払われたコストは何だったのか？ ▶
  - 自然に還元されない合成化学物質のリスク
  - 人間が「自然を支配」する産業文明の考え方に？
- ブックチン『合成環境』(1955 1962)
- カーソン『沈黙の春』(1962) ▶ 環境運動 ▶
  - 量的生活水準で測る豊かさに？ ▶ 生活の質へ
- ニクソン時代の環境立法



# 成長の限界(1972)

- 「天然資源の枯渇，軍事技術の進歩による大規模破壊の脅威から生じている“人類の危機を回避する道”を探る」MITチームの報告
- コンピュータ・シミュレーションにより100年先までの工業化，人口増加，栄養不足，天然資源の枯渇，環境悪化を予測
- ▶ 「豊かな社会」を支えてきた大量生産・大量輸送・大量消費・大量廃棄型の経済システムの持続不可能性に警鐘乱打。翌年石油危機

# 資源環境問題

## 危機感高まる70年代

- 危機とは、このまま続けていけば破局になる、と言う事態 ▶
- サバイバルのためには変わることが必要
- ①パラダイム転換が必要
- ②火事場力が出る環境
  - 石油危機 ▶ 省エネ・省力技術開発加速
- 今は危機の時代 ▶ 危機を認識し実感すれば革新的アイデアと実行力が出る筈の時代

# 貧困・格差拡大と持続可能性 —なぜ問題なのか?—

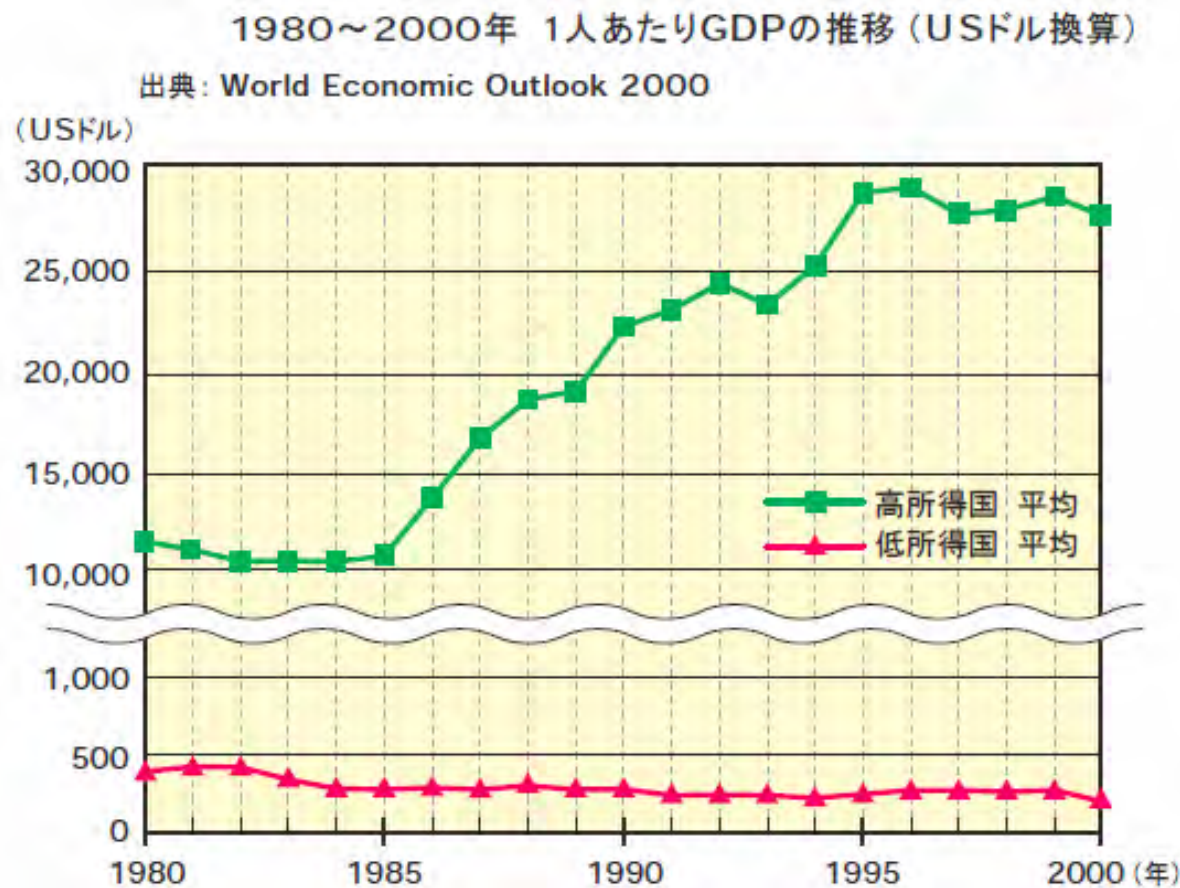
- ①政治倫理的要因＝地球秩序の正当性を破壊 ▶ 不公正な秩序は現体制への挑戦(創造的破壊・再構築)を正当化する ▶ テロリスト団体拡大の原動力
- ②生物物理的要因＝地球の収容能力の限界—発展途上国が今の先進国と同じ形の経済発展をくりかえしたら地球はどうなるか？

# 南北格差の実態

- **1/4のリッチな地球住民が3/4以上の地球の資源を独占 ▶ 3/4の貧しい地球住民は1/4の富**
- **世界人口の5人に1人〔12億人〕は1日1ドル以下の生活で飢餓状態**
- **毎日4万人の子供が餓死〔国連FAO〕**
- **日本は毎年3000万人分の食糧を廃棄**
- **世界人口の4人に1人は肥満**
- **ODAは軍事費の1/10〔US 1/25; 日本1/2〕**
- **南の88カ国に基本的な教育・医療・女性の出産家族計画導入費用は米国の軍事費の1/7(世銀/WHOの試算)**

# 南北格差の拡大

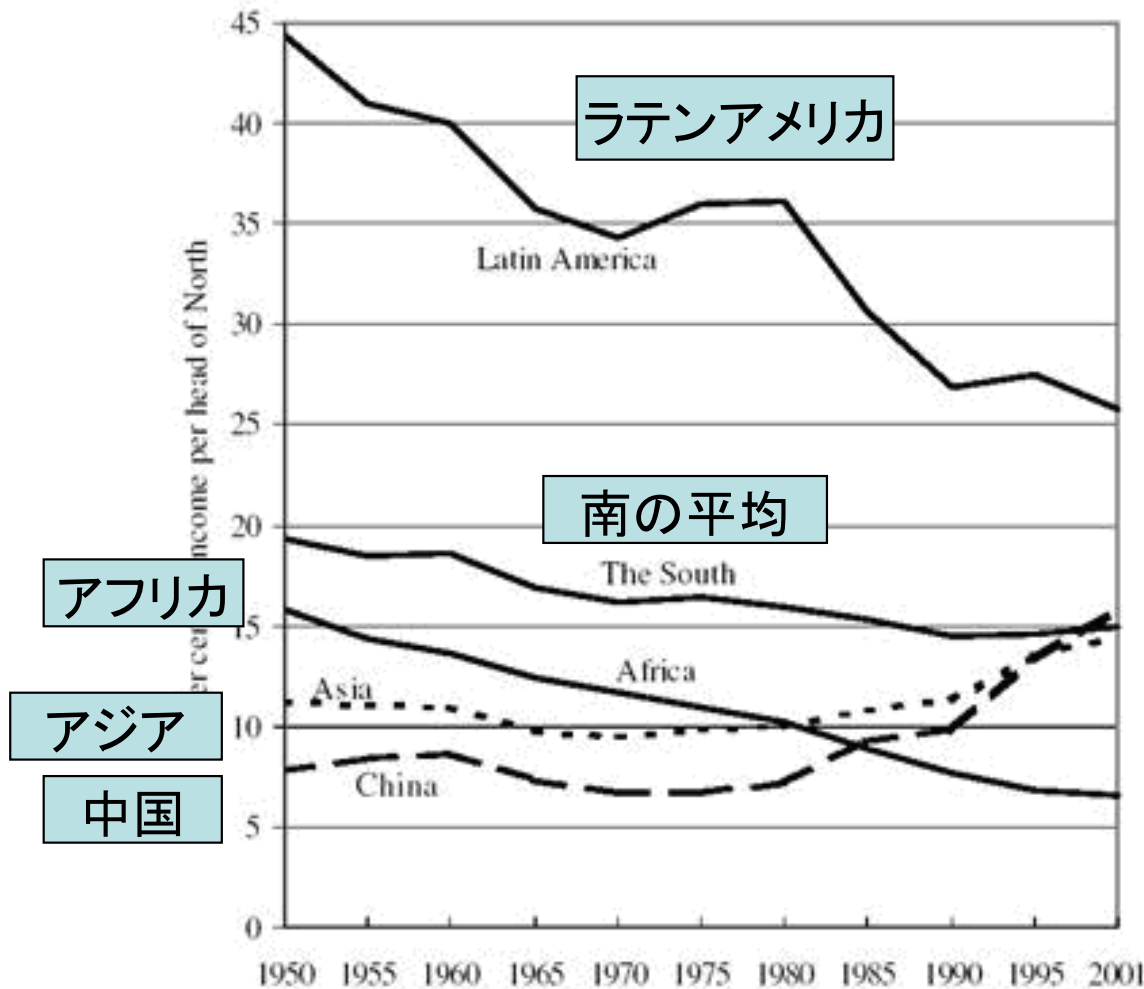
## 1980-2000年一人当たりGDPの推移 〔USドル換算〕



出典: サステナビリティの科学的基礎に  
関する研究: サマリーレポート 2006

# 一人当たり収入一南は北の何%？

Income per Head as Percentage of North

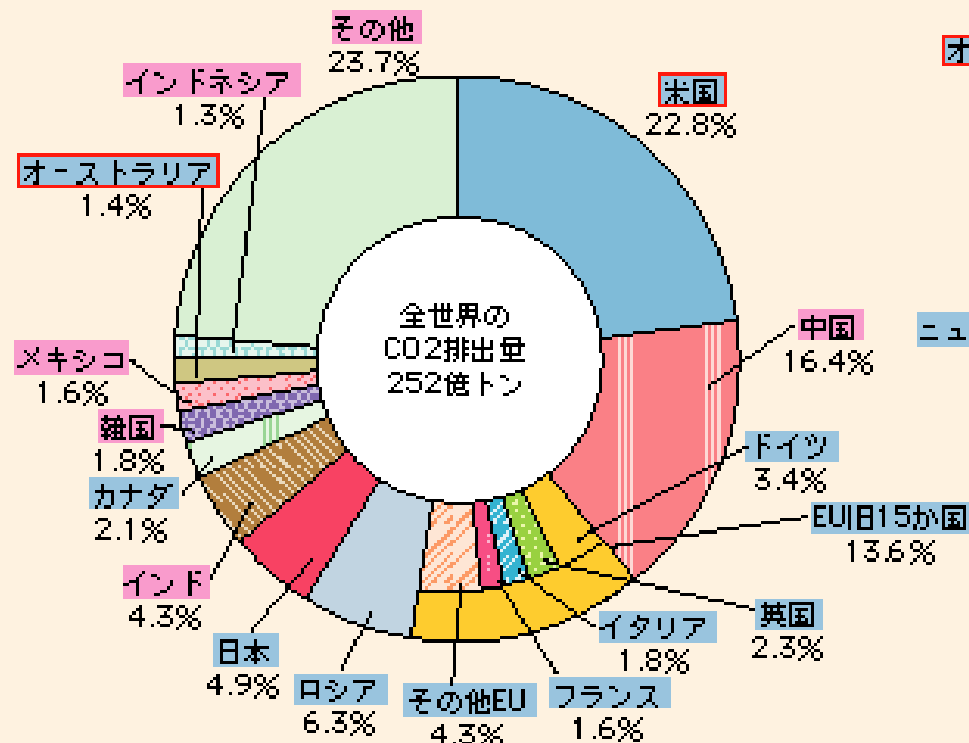


Note: *North* includes North America, Australia, New Zealand, Japan, and Western Europe

出典: Bob Sutcliffe, 'World Inequality and Globalization', *Oxford Review of Economic Policy*, Vol 20, No. 1, 2004, based on Angus Maddison, *The World Economy: Historical Statistics*, OECD, Paris, 2003  
Global Policy Forum

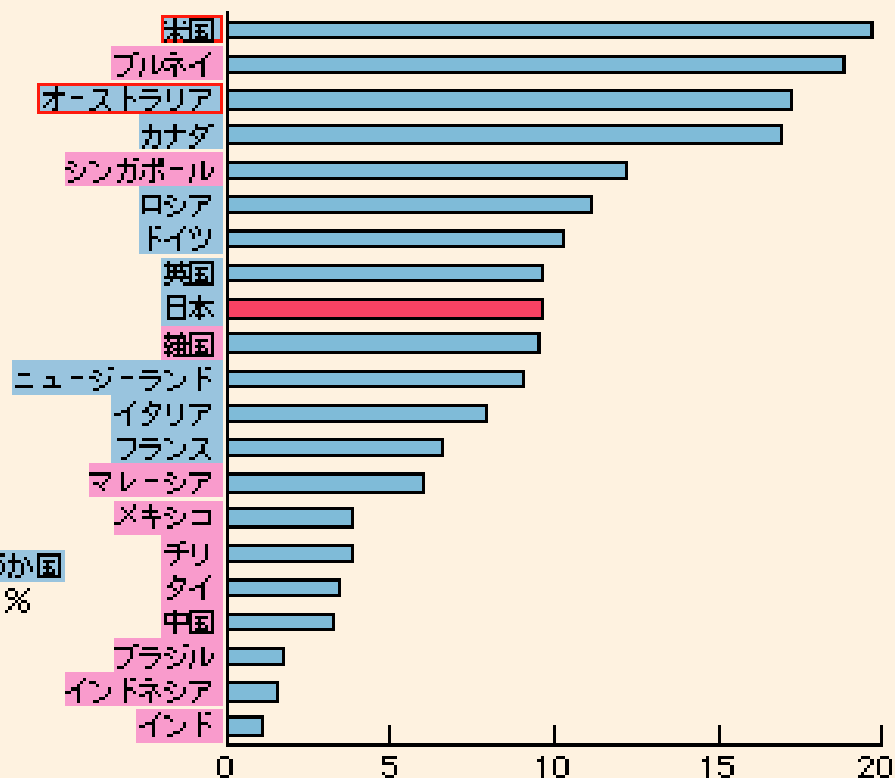
# 二酸化炭素の国別排出量と国別1人当たり排出量

国別排出量（2003年）



国別1人当たり排出量（2003年）

（単位：トン/人（二酸化炭素換算））



主な排出国の京都議定書に基づく2008-2012年の約束期間における温室効果ガスの削減義務について

.....削減義務なし

.....削減義務あり

（注：京都議定書を批准していない国は 〇 で示した。）

資料：日本エネルギー経済研究所編『エネルギー・経済統計要覧（2006年版）』より環境省作成

# 地球の環境容量と人間活動のバランスと 地球の公正をはかるエコロジカルフットプリント

表2-1-2 各国のエコロジカルフットプリント

国名	人口 (人)	エコロジカル フットプリント (ha/人) (A)	実際に供給可能 な面積 (ha/人) (B)	環境に対する 「負債」 (ha/人) (A-B)
世界合計	5,744,872,000	2.85	2.18	0.67
日本	125,769,000	5.94	0.86	5.08
アメリカ	269,439,000	12.22	5.57	6.66
ドイツ	81,909,000	6.31	2.48	3.83
中国	1,232,456,000	1.84	0.89	0.96
ニュージーランド	3,720,000	9.54	15.80	-6.26
エチオピア	56,789,000	0.85	0.68	0.18
バングラディシュ	120,594,000	0.60	0.08	0.52
ブラジル	161,533,000	2.60	11.56	-8.96

注：端数処理の関係から、各行における計算は必ずしも一致しません。

出典：WWF『Living Planet Report 2000』  
(2000年)

出典：環境白書2001年

世界中の人々が日本人と同様の生活をするに…

$$\frac{5.94}{2.18} \div 2.7$$

つまり、地球はもう



必要です



# 環境コストの南へのしわよせ

- 南からの輸入による環境コストのおしつけ
  - ◆ 農産物の輸出国では大量の水を使い土壌劣化
  - ◆ 鉱物資源輸出国では鉱害発生
  - ◆ おかげで先進国はきれいな環境
  - ◆ 輸入大国日本の海外でのフットプリントは大きい
- 貧困ゆえの環境破壊
  - ◆ 森林の過剰伐採, 焼畑, 過剰放牧, 農地の荒廃, 砂漠化 ▶ 貧しい国の貧しい住民を直撃
  - ◆ 地域住民の基礎的な生活維持や生命維持にかかわる緊急性

# 環境正義運動

有害廃棄物処理をめぐり、環境被害が世界的にも各国内においても貧困層にしわ寄せされていることに抗議する運動

アメリカの運動＝マイノリティ居住区に有害廃棄物処理場が集中 ▶ 抗議運動・訴訟・ロビー活動 ▶ スーパーファンド法改正と延長

世界の環境正義運動＝北の環境規制強化 ▶ 南への有害廃棄物の「輸出」急増＋IMF/世銀の政策〔債務国の債務返済のために廃棄物輸入を奨励〕 ▶ 抗議運動 ▶ 有害廃棄物越境禁止(1989年バーゼル)条約

# 正当性のない秩序は不安定

- 南北格差拡大 ▶ 「今の世界秩序＝政治経済の仕組みは正しくない」と感じる貧困層（が多数派）の不満増大 ▶ 現状変革・破壊へのエネルギー増大 ▶ 犯罪・テロ
- 9・11のショック ▶ 「貧困と格差は先進国の安全保障を脅かす」▶
- 先進国サミットも貧困撲滅宣言・ODA増額

# 持続可能な世界をつくるには パラダイム転換が必要

- パラダイムとは各国の政府，企業，市民の思考や行動を支配している常識をさす。
- 持続可能な世界の構築にはパラダイムの転換、常識を捨てて新しい発想に基づく社会秩序のヴィジョンと戦略が必要 ▶
- さらにその戦略に基づき生産様式からライフスタイルまで変えていくことが必要

# パラダイム転換はいつ起きるのか？

## トーマス・クーン

- ◆パラダイムと矛盾する事象（経験や観察・実験結果）が増えて危機の状態に陥ったとき、転換せざるを得なくなる。天動説から地動説へのコペルニクスのパラダイム転換が一例。今は、そういう時期。
- ◆過去3回の地球環境サミットは、地球規模での意識変革、パラダイム転換を少しずつだが促進する効果をもった。

# パラダイムと現実の乖離

## 従来のパラダイム

- ①自由競争による福祉の最大化〔競争⇒最適の資源配分⇒全体に波及〕
- ②成長無限論
- ③人間中心主義・技術〔理性〕信仰〔技術ですべて解決できる〕・物質主義〔消費増大⇒幸福増大〕

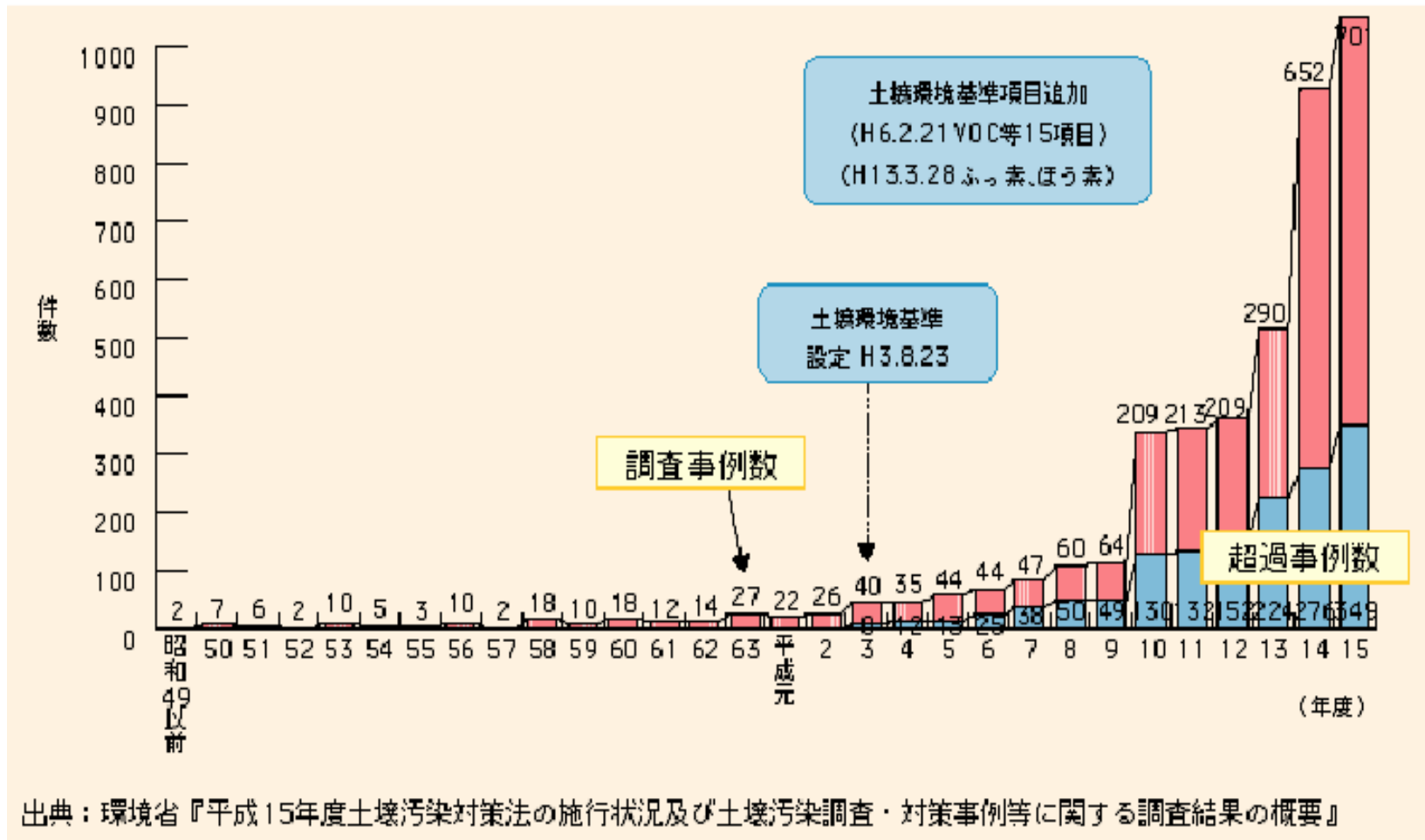
## 現実

- ①格差拡大・
- ②環境破壊・資源枯渇, 越境廃棄物処理紛争・資源紛争
- ③リスク社会を現出⇒WMD拡散・テロ・犯罪のグローバル化・予測不能なリスクと不安▶  
新パラダイム=持続可能性

# リスク社会

- 化学薬品災害，環境ホルモン、遺伝子組み換え食品等をめぐる不安増大
- 核兵器や化学兵器の恐怖が日常化
- 環境・社会の両面において安心のない世界
- ベック『リスク社会論』＝合理主義・技術主義に潜む危険性を分析し、パラダイム転換の必要性を説く

# リスク社会のリスクの顕在化例 年度別土壌汚染判明事例数





# 持続可能性達成についての 代表的考え方

- ①システム内改良論＝今の世界の経済・政治システムの中で経済を測る指数を変えたり、税財政政策・規制の組み合わせで達成できると考える
  
- ②システム変革論＝今の世界の経済・政治構造に持続不可能な人間活動を生み出す仕組みがある  
▶だから今のシステムを根本的に変えなければ持続可能性は達成できない、と考える

# システム内改良論＝ エコロジカル近代化論

- 今のシステム（＝資本主義と主権国家体制）  
の中での改革論
- 価格に環境・社会コストの内部化 ▶ 国際協調  
と持続可能性を測る指標の開発が必要
- 再生可能な資源と循環型システムへ
- 使い捨てから修理して長く使う（計画的陳腐  
化⇒長寿命製品へ）
- 所有からレンタルへ
- 先進国の政府・企業・多くのNGOが主張

# エコ近代化論

## 環境と経済は両立する

- 環境規制 ▶ 技術革新 ▶ 経済発展  
〔環境ビジネスによる発展を期待〕
- 環境基準が企業のサバイバルを決める時代が来る
  - ブラウン—エコ・エコノミー論
  - WBCSD(持続可能な発展のための世界経済人会議)—エコ効率論
  - IISD持続可能な発展戦略
  - ホーケン/ロビンズの自然資本主義論

# エコ・エコノミー論 (Brown)

## 市場経済の欠陥

- 1) 間接的コストを価格に反映させない、
- 2) 自然の多面的機能を評価できない
- 3) 環境維持再生収容力の限界に配慮しない

## 是正策

- 価格に環境コスト(間接コスト)を反映させ生態系の危機的実態を市場に物語らせる[エコ・エコノミー化]
- 税制改革[環境税]と財政政策[補助金シフト]

市場で決められた従来の経済からエコロジー原則に従うエコ・エコノミーに転換するのは史上最初の大事業  
▶ 循環型生産システムへの転換・ライフスタイルの転換 ▶ 史上最大の投資機会

# WBCSD〔SDのための世界経済人会議〕の エコ効率論

- リオ地球環境サミット〔1992〕に備えてスタート
- エコ効率性=エコノミーとエコロジーの二つの資源の効率向上により資源使用量と廃棄物・汚染を減らし、製品のライフサイクルを通して資源集約度と環境負荷の削減をめざす
- 環境コストの内部化 ▶ 資源の効率的利用と回収・再利用を促進, 汚染発生を防ぐことがコスト低下につながる仕組みをつくる
- 私欲で行動する企業と個人を持続可能性に向かう方向へ導くための「道」= 欲の力をかりて無欲の義に当てはまることをするのが沢庵の道(山本良一)

# ファクター10 (ブッパタール研究所・WBCSD)

- 南北問題の解決については、今後50年間に先進国の自然の総採取量を1/10に減らすことが必要 ▶ 平均的資源生産性を現在の10倍にする脱物質化プロセスが必要
- 南の発展には
  - 国際金融資本の役割が重要 ▶ 資本の流れについての規範づくりが課題
  - 技術移転の促進
- しかし、強制力のある規制には反対 ▶ 自主規制論

# ファクター10で 資源消費・環境汚染を1/10に

## 「ファクター」とは？

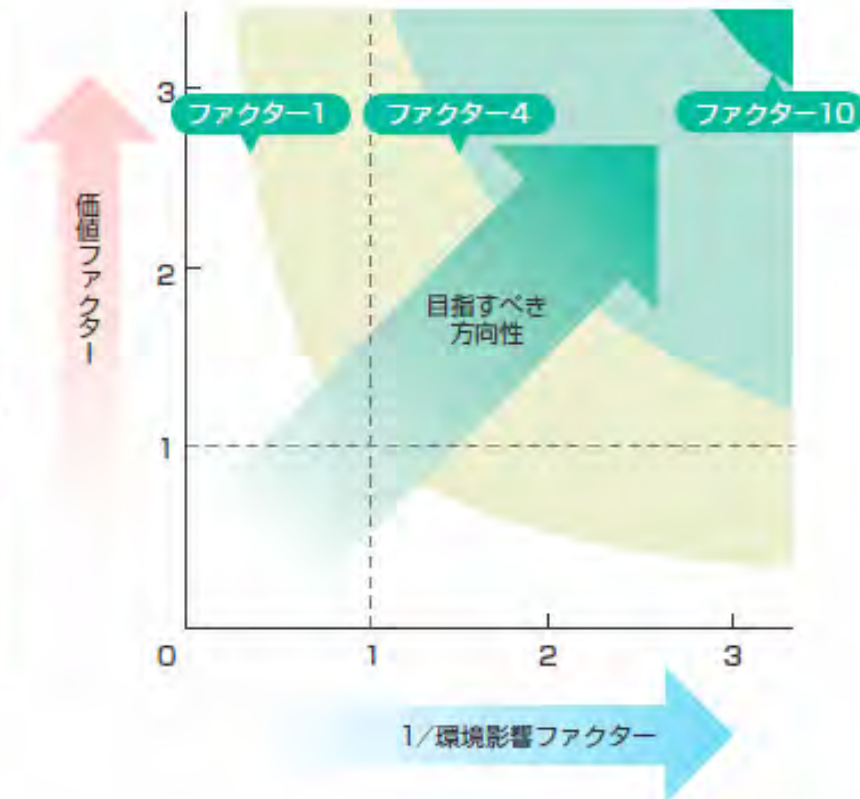
「ファクター」は製品の「環境影響」と「価値」を総合的に評価したものです。新製品と過去の製品を比較し、どれだけその製品の豊かさがアップしているかがファクター値を通して分かります。下のグラフはその関係を表しています。ファクターの値が高いほどバランスのとれた良い製品といえます。

$$\text{環境効率} = \frac{\text{製品の価値}}{\text{製品の環境影響}}$$

↑ 質を高める  
↓ 負担を小さくする

「製品の環境影響」が小さいほど、また「製品の価値」が大きいほど、環境効率の数値は大きくなります。この数値が大きいほどよい製品といえます。

$$\text{ファクター} = \frac{\text{評価製品の環境効率}}{\text{基準製品の環境効率}}$$



# IISD(持続可能な発展に関する国際 研究所)の持続可能な開発戦略

従来の発展モデルは不成功 ▶ SDモデルを開発中  
アフリカ5カ国における活動に基づき、

持続可能な生活には、

- 現地の伝統に基づく知識+コミュニティがもつ強味+現代科学+適正技術を実践活動に結びつける政策  
(**enabling policies**) および
- 有効かつ透明な統治構造+教育・訓練+信用と投資を統合することが必要
- 直接投資については発展途上国の権利重視のルール作りを提唱[従来は多国籍企業の利益重視]



# 自然資本主義論(Hawken & Lovins)

- ・ 資本には産業資本・自然資本・人的資本
- 自然資本とは生命維持に不可欠な環境を提供してくれる土壌・水・大気の循環など＝天然資源・生命システム
- 今の資本主義は、産業資本の価値は認めるが、自然資本と人的資本の基礎をなす社会制度・文化制度の価値を無視
- 経済成長が資源の枯渇、自然破壊をもたらし、資源紛争・貧困・飢餓・感染症・犯罪・汚職・無秩序を生んだ

# 自然資本主義—産業構造転換の指針

## ①資源生産性の根本的改善〔ファクター10〕

## ②バイオミミクリ

◆今の産業システムの石油化学依存症から脱却

◆バイオミミクリでは、自然の穏やかな化学技術を学び、まねすることにより、環境保全、経済成長、雇用の増大、生活の向上を達成できる

## ③サービスとフローに基づく経済への移行

◆モノを所有するのではなく、借りて使う ▶モノは修理・再利用・再製造のたびにメーカーのもとに里帰りし、メーカーが廃棄・再利用の全過程に責任を持つシステムへ

## ④自然資本への再投資

# エコ近代化論(続き)

## 南北問題

- 先進国はエコ効率化・脱物質化
  - ファクター10 ⇒ 資源効率を10倍にする
  - 経済水準を下げずに資源消費量を減らす
  - 援助、直接投資、債務免除による貧困是正策
- 発展途上国はエコ経済モデルによる発展
  - エネルギーは地元で供給〔風力・太陽光・バイオマス・地熱など再生可能エネルギー源〕
  - 包括的リサイクル経済により原料資源輸入削減
  - 女性の教育と地位向上⇒人口安定化

# システム変革論

## 今の世界の政治経済において 変えなければならない点

- ①環境負荷を無視した資本主義の拡大志向
- ②格差拡大を加速するグローバル化
- ③メガ企業・金融資本による世界経済支配
- ④民主主義の形骸化
- ⑤地球規模の諸問題への対処能力不足
- ⑥物質主義・経済効率至上主義
- ⑦人間と自然の絆を断つ社会経済体制

# レオポルドの土地倫理(1949)

- 人間が土地の分離、感情的一体感の喪失に環境問題の根源がある
- 土地=土地・水・動植物の全体が共同体
- 人間はその共同体の一員としての倫理的責任感をもつべき ▶ 土地に対し愛情・尊敬・畏敬の念が生まれ土地の価値〔哲学的意味での価値も含め〕がわかり、土地の変化への感受性も高まり、行動も変わる

# セイルの生命地域主義(1985)

- 自分の周りの土地を知り、土地とともに生きることができ  
るような社会をつくるための原理
- 生態系的にまとまりのある地域〔生命地域〕を単位として、  
国から地方レベルまで、行政単位の境界線を引き直し、地方  
単位の自治を徹底 ▶ 共同体再生
- 生命地域には3レベル:生態地域(ecoregion), 地勢地  
域(georegin), 生活地域(vitaregion)
- 地域の生態系と地域の文化に根ざした自給自足経済  
単位が水平的に並存する世界を持続可能な世界として  
想定

# デイリーの定常経済論

- 低レベルの消費⇒スループットにより、人とモノのストック[自然資本]が一定のレベルに保たれる経済
- 基本的ニーズを満たせるレベルに達した国は成長経済から定常経済に移るように経済構造を改革
- めざすのは質素・節約型の持続可能な社会
  - ◆分権・分散化 ▶ 地方の自立 ▶ 個人的自給自足性
  - ◆顔の見える共同体で自然と接触の保たれる生活
  - ◆モノより心の充実
  - ◆多様性

# 定常型社会〔デイリー〕 社会倫理のキーワード

- **Enoughness**=足るを知る心 ▶ 充足文化
- **Stewardship**=人間だけでなくすべての生命、すべての創造物に対する同胞愛を含むいたわりの気持ち
- **humility**謙虚さ=自然を人間の道具と見て好きに変えようとする態度は傲慢かつ危険
- **Holism**=総体はそのパーツの集合より偉大である



# システム変革論

## バーロの自給自足共同体論

先進国が自給自足経済に移行することの意義

- ①物質的消費水準の低下 ▶ 精神的基準と社会的基準を重視する精神的に豊かで絆の強い社会になる
- ②「余計な物をもつことは自由を制限する」[ソロー] ▶ 人間性をフルに発展させるためには物をため込む習性を捨てる心理革命が必要
- ③南北格差の縮小 ▶ 富の分配の平等化には先進国は資源消費量を1/3に減らす
- ④発展途上国は、世界市場から離れて独自の発展・独自の文明をつくるべきだ

# システム変革論の戦略 共通点

- 脱成長・脱開発論⇒有限の資源と環境の中で無限の成長を志向する資本主義原理を批判⇒定常型経済を志向
- 分散型・循環型・自給自足志向の地域循環完結型経済を志向
- 人間的スケールの政治・経済制度
- 分権化・小規模地元企業からなる共同体の再生
- 市民参加の政治
- 横のつながりからなるネットワーク社会志向

# システム変革論

## 南北格差

### 連帯型

- 途上国の自立的内発的發展を重視
- 伝統文化から持続可能性についてのヒントを見つけ、生かす
- 世界資源の再分配を必要視する
- 富裕な国は經濟を定常化し發展途上国に資源環境容量を返す

# 中間論

## コーテンのグローバル経済批判

- 社会と環境の崩壊の原因は、過剰な生産活動による生態系の再生産能力の破綻と地域社会の崩壊
- 根本原因はメガ企業とメガ金融機関に支配されたグローバル経済というシステム
- 画一的消費文化 ▶ 飽くなき物欲を刺激 ▶ 物神崇拜  
▶ 過剰消費 ▶ 環境破壊
- 競争原理のグローバル化 ▶ 格差拡大
- グローバル支配エリートに権力集中 ▶ 民主主義の空洞化 ▶ 公益に責任をもつべき政府の弱体化

# 変革の方法—コーテンの提案

- ①ステークホルダー〔利害関係者〕資本主義に変えていく
  - 利害関係者〔＝株主、経営者、被雇用者のみならず、地域共同体・原材料・部品供給者などを含む〕が
  - 企業の所有者として政策決定に参加するシステムへの移行〔経済的民主化〕▶ 経済主体と目的の根本的变化
- ②企業は人間的サイズの地元密着型企业へ縮小再編成
- ③地域に根付いた自給自足的経済単位
- ④経済的利害ではなく「地球を共有する仲間」〔地球共同体〕意識で結ばれたグローバルな経済システムを展望

# システム維持派と変革派の間の コンセンサス

- ◆環境保全と社会的公正は必要条件〔合意〕
- ◆人間も生態系の一部〔合意。しかし・・・〕。
  - ☺自然に固有の価値を認める〔体制変革論に多い〕と
  - ☺資源としての価値しか認めない、の違いがある
- ◆グローバル資本主義批判〔合意；理由は違う〕
  - ☺資本主義原理に埋め込まれた拡大志向批判(体制変革)
  - ☺自由放任の行き過ぎ批判〔体制内〕

# アクターは誰か？

## システム維持論

- 政府・国際機関・NGO・企業・専門家団体
- 国家〔政治家・官僚〕=財政政策・税制改革・規制・市場ツール
- 企業=技術革新を左右する企業の投資計画・発展途上国の持続可能な発展に必要な〔資本・技術移転〕の鍵を握る
- NGO=研究・情報発信・政策提案⇒企業と政府に対する監視・圧力行使

# アクターは誰か？

## システム変革論

- 人類全体=全人類の危機感を高めることが変革への第一歩⇒批判=全人類を十把一絡げにすると、敵〔支配エリート層〕が見えなくなる
- 持続可能な共同体モデルをつくる⇒批判=ユートピア論
- ヴィジョンと戦略を示し強い指導力を発揮するグループ⇒批判=多様性・知識の相対性を認める今の世界では難しい
- ネットワークで今のシステムに批判のある環境・人権・民主化意識を共有する市民団体・新社会運動とシステム落ちこぼれグループ(南北の貧困層・失業者・合法不法移民)を持続可能運動のアクターにまとめあげていく⇒1999年のシアトルの反グローバル化運動



# 持続可能な世界のビジョン(試案)

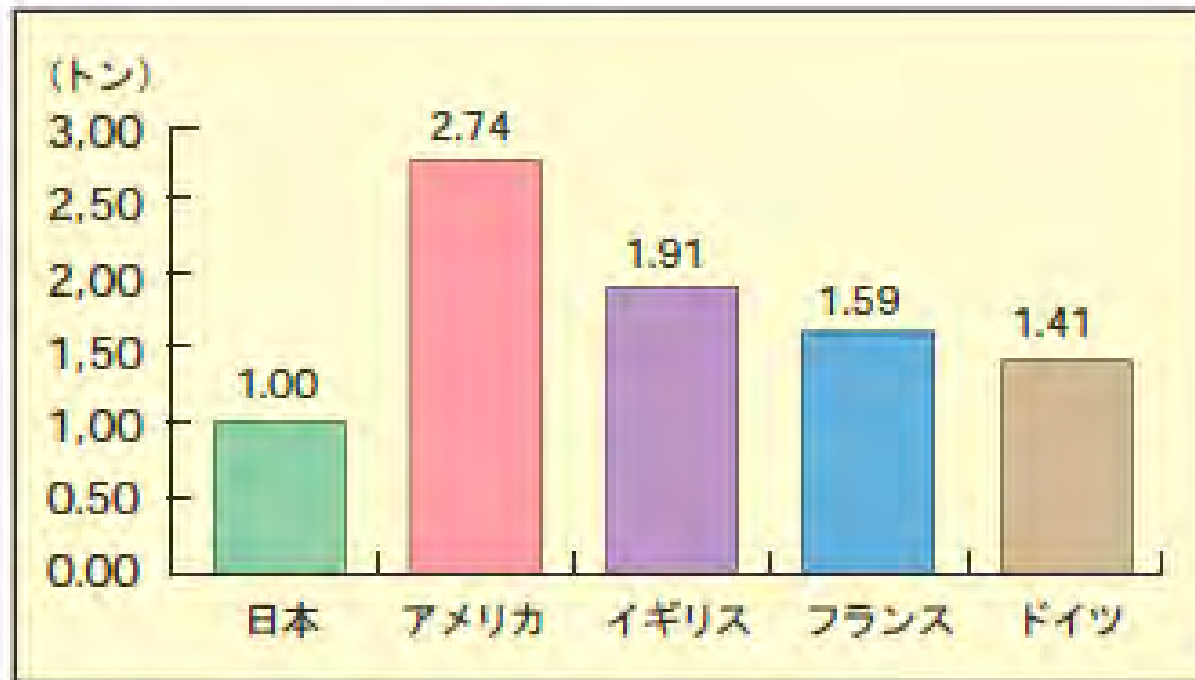
## 国内社会

### 持続可能な社会モデルづくりの実験

- 国レベルでも地方レベルでも自給自足〔循環〕定常型経済をめざす
  - － 地産地消＝生活必需品はなるべく地元で自給
  - － 地域の生態系と文化に根ざしたコミュニティ単位の経済循環の確立をめざす
- ライフスタイルも変わる ▶ 脱物質 ▶ 人間関係・心の豊かさ重視へ
  - － 足りないものだけ地域外から購入
  - － 資源を地球から借りて返す仕組みづくり
  - － モノもなるべく所有からレンタルや共同使用へ
  - － 相互扶助の復活

# GDPあたりの一次エネルギー供給の各国比較

出典：エネルギー白書2004

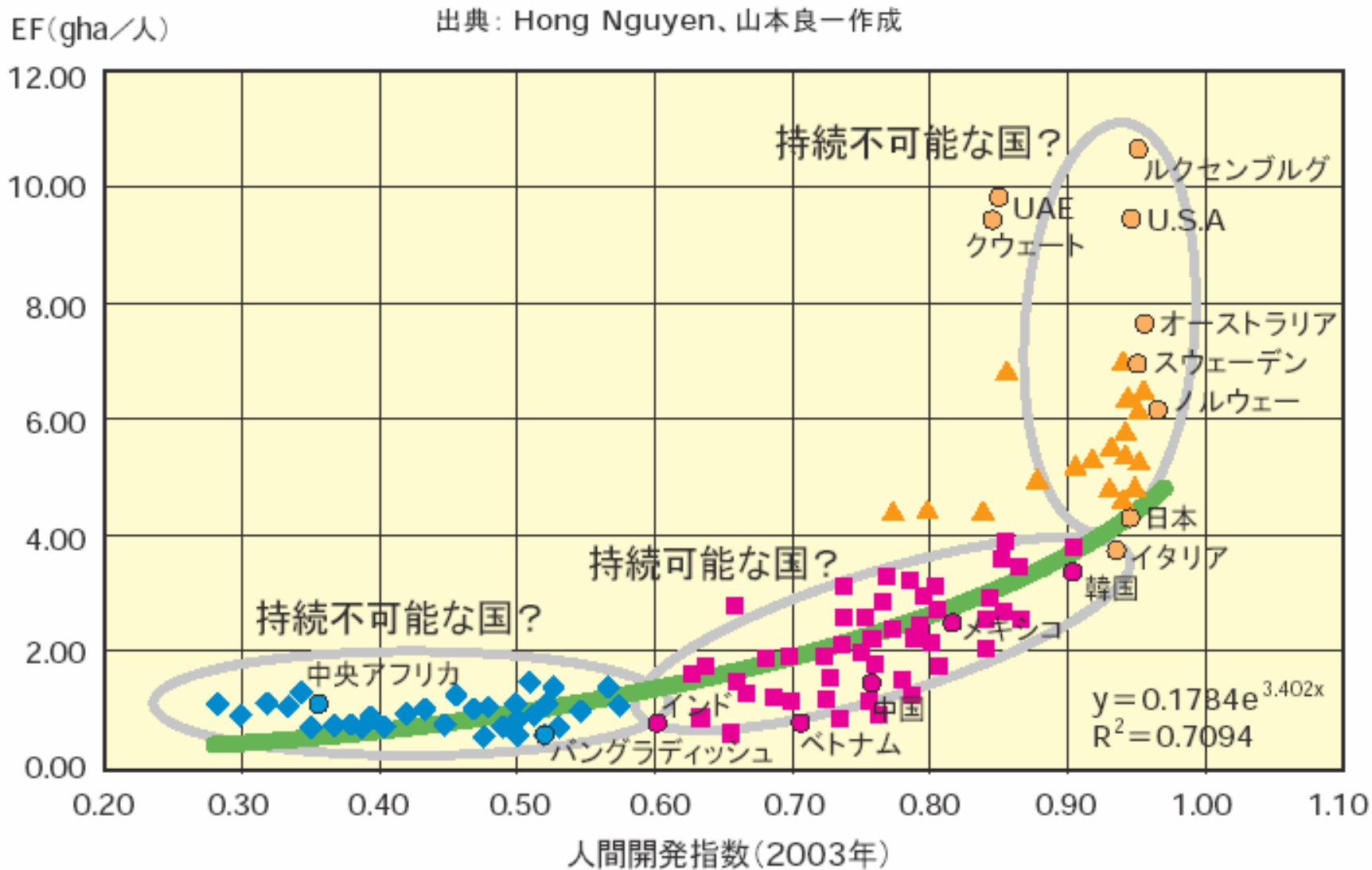


注: エネルギー消費量 (原油換算トン) / 実質GDP  
(いずれも2001年度実績値) を日本=1として換算

資料: (財)日本エネルギー経済研究所「エネルギー・経済統計要覧」

出典: サステナビリティの科学的基礎に  
関する研究: サマリーレポート 2006

# EFと人間開発指数の関係



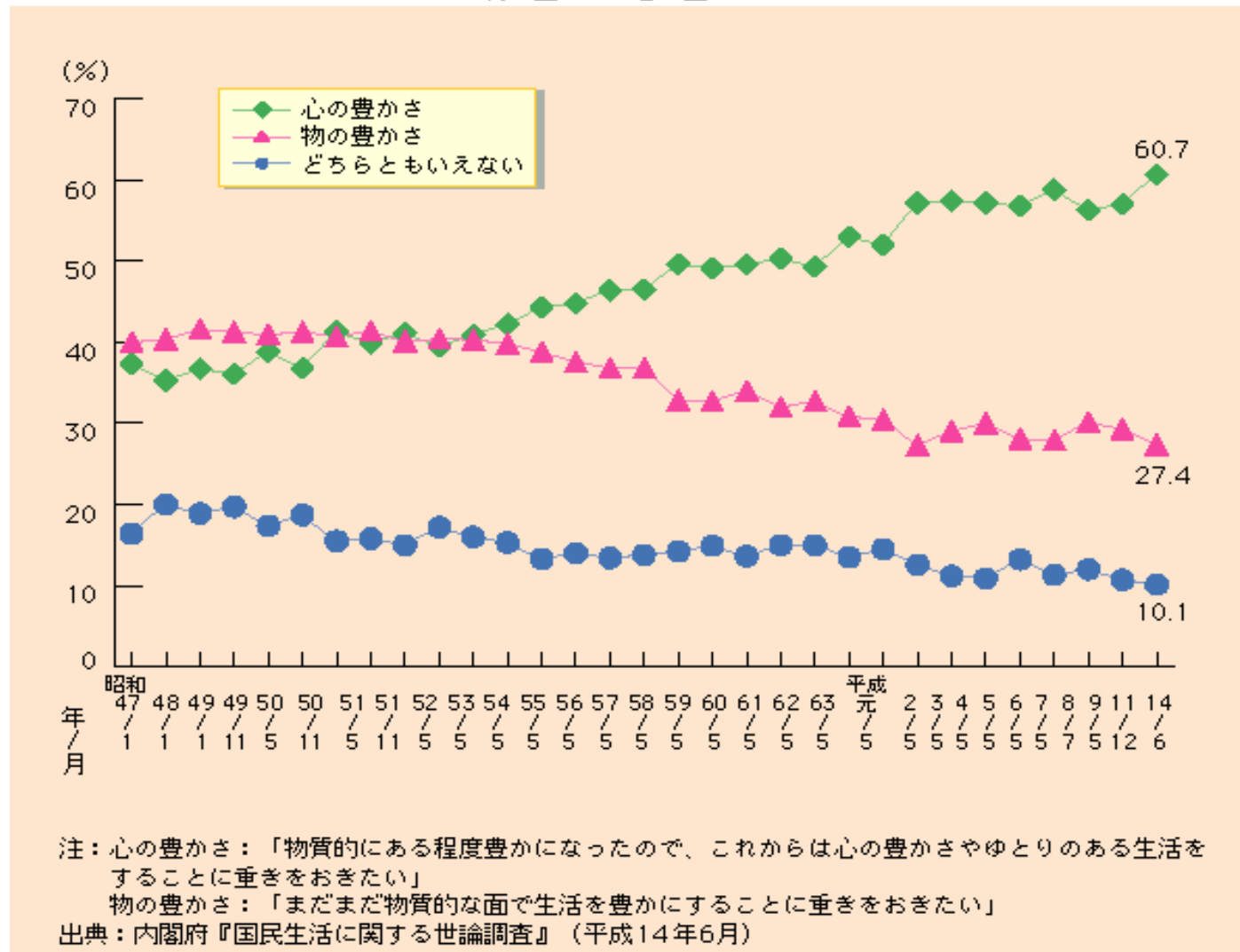
# 今の「豊かさ」の一面

- 「豊かさ」「便利快適」⇒飽食・喫煙・運動不足⇒生活習慣病（肥満、糖尿病、高血圧症、高脂血症）⇒心筋梗塞・脳卒中・ガンが死亡原因の6割
- 都市化・工業化 ▶ 共同体の崩壊 ▶ 村の一員から組織の歯車へ ▶ 個人の原子化と核家族化 ▶ 福祉国家 ▶ 助け合いはいらなくなった？
- 競争と技術革新の加速 ▶
- 人間関係（社会資本）の希薄化 ▶
- 自分は何の役に立っているのか見えにくい社会
- <http://www.chikyumura.org/tushin/modules/tinyd0/index.php?id=4>

# 価値観の変化

## モノの豊かさから心の豊かさへ

物の豊かさか心の豊かさか



# 脱物質化・定常型経済への移行により 生活の質は向上する

- 成長〔量的拡大〕しなくても発展〔質的向上〕はできる。(ミル, デイリーほか) ▶ 真の豊かさとは？
- 先進国は過剰消費中毒に陥っている
  - ▶ 物質的に簡素になることにより、肉体面でも精神面でも生活の質は向上する
    - 物質的に「適正な消費」社会において始めて精神的・社会的に豊かな共同体生活が可能になる
- 南北格差解決の必要条件・北の倫理的責任

# 持続可能な世界のヴィジョン〔試案〕

## 世界経済

貿易—モノの貿易とソフトの貿易を分ける

- モノはなるべく地域で自給自足
- ソフト〔知識集約型製品・サービス〕は自由貿易
- 環境コストの内部化 ▶ 資源の価格上昇
- ▶ 資源保全と発展途上国の利益保全

投資の現地化

- 現地のニーズの充足と雇用創出 ← 適正技術
- 技術移転・経営の現地化
- 現地の自給自足時代の知恵の発掘と内発的発展
- 投資の現地化〔現地に再投資〕
- ビジネス規範の確立・自主規制からスタート

# 投資の現地化戦略の意義

- 国内では市場が飽和状態に達し、投資機会も限られている先進国の余剰資本を活用できる唯一の戦略
- ネクスト・マーケットは発展途上国（プラハロード・WBCSD）
- 先進国の計画的陳腐化や見せるため（虚栄）の消費「需要」とは本質的に異なる「真のニーズ」を満たすための地球公益に資する資本主義への転換